

『源氏物語』「花宴」における対比描写法についての考察

—左大臣の「恨めしさ」の対象をめぐって—

古 瀬 雅 義

要 旨

『源氏物語』卷八「花宴」は、光源氏二十歳の春を描いた巻である。直前の「紅葉賀」巻と春秋の対照性が明確なため、両巻の構成と展開が論じられてきた。大きな対照性が認められることについて異論の余地はない。しかしその対照性を支えている場面ごとの細かな本文表現の対比や、プロット相互の関連性、また登場人物たちの心情表現とその展開の有り様については、さらなる考察が待たれている。『源氏物語』を長編物語として展開させるメカニズムの解明に直結するからである。「紅葉賀」巻で光源氏が清涼殿の試楽や朱雀院で披露した渾身の舞姿は、人々の記憶に残る感動的な光景であった。「花宴」巻では群臣の居並ぶ前で春宮が光源氏に挿頭の花を下賜して春鶯囀を舞うよう命じる。やむなく応じた光源氏の見事な舞姿を見て、舅の左大臣は「恨めしさ」も忘れて涙を流すが、この「恨めしさ」とは何を対象としたものか。当該場面の構成と物語展開の視点から源氏古注も含めた先行説を検証し、新しい解釈を提示

する。

キーワード

『源氏物語』・「花宴」・左大臣・心情描写・展開構成

はじめに

『源氏物語』卷八「花宴」は、直前の「紅葉賀」巻との対照性が確認できる。すなわち「紅葉賀」巻では秋の紅葉を愛でてまず内裏の清涼殿で試楽が催され、次いで朱雀院での行幸で本番が披露された様子を描写していくのに対し、「花宴」巻では、春の桜を愛でて内裏の紫宸殿（南殿）で桜の花の宴が催され、次いで右大臣邸で藤の花の宴が催された様子が描かれ、今をときめく若者たちである光源氏と頭中将による舞楽が演じられている。しかも披露された演目は青海波と秋風楽に対して、春鶯囀と柳花苑であった。「紅葉賀」巻の秋と「花宴」巻の春の時節が、場面として対照的に描写され、そこでの登場人物たちの言動と心情を詳細に描き出すことで、物語

のプロットが大きく展開していく構成となっているのである。

この両巻の大きな対照性については研究が進み、周知のことでもあるから、ここで改めて論じるまでもないが、そういった構成上の大きな対照性を支えるために、各場面での登場人物たちの心情描写がどのように対比されながら描かれているのか、細かな分析と検証が必要になっていくことは言を俟たない。

本稿は巻八「花宴」冒頭部に描かれている紫宸殿（南殿）で催された桜の花の宴において、東宮（のちの朱雀院）が挿頭の花を下賜してまでの切なる要望により、ついに辞退しきれなくなった光源氏がほんの一さし春鶯囀を舞う姿を左大臣が見て、「恨めしさ」も忘れて涙ぐみ、続いて桐壺帝が「頭中将、いづら。遅し」と指名して左大臣の嫡子である頭中将に柳花苑を舞わせ、褒美の御衣を賜るに至る場面の構成に注目し、本文の表現とプロットに仕組まれた対照性を分析することで、『源氏物語』の物語を展開させるメカニズムの一端を考察するものである。

一、南殿における桜の花の宴

光源氏は藤壺宮との道ならぬ恋の形代として、巻五「若紫」で姪の若紫を自邸に引き取り養育しているが、それも原因の一つとなって妻葵の上との夫婦仲は相変わらず心通わぬままで、舅の左大臣は心を痛めていた。しかも、異母兄春宮の母方実家である右大臣家の勢力が増大し、弘徽殿女御の強引な言動も目立つたため、春宮即位後の自分の立ち位置にも不安がある状況であった。それでも衆目は光

源氏に集中する。

光源氏が「紅葉賀」で舞った青海波の見事さは、一年半経った後でも人々の記憶に残るものであった。翌々年春の二月二十余日に桐壺帝が催した南殿の桜の花の宴において、光源氏は「春」字を賜ったの詩作に次いで、東宮のたつての要望により春鶯囀を舞った。

〈資料一〉光源氏の春鶯囀と頭中将の柳花苑

衆どもなどは、さらにも言はず調へさせ給へり。やうやう入り日になるほど、春の鶯囀るといふ舞いとおもしろく見ゆるに、源氏の御紅葉の賀のをり思し出でられて、春宮、かざし賜はせて、切に責めのたまはするに、逃れ難くて、立ちて、のどかに、袖返すところを一をれ気色ばかり舞ひ給へるに、似るべきものなく見ゆ。左大臣、恨めしさも忘れて、涙落とし給ふ。

〔桐壺帝〕頭中将、いづら。遅し」とあれば、柳花苑といふ舞を、これは今少し過ぐして、かかることもや、と心遣ひやしけむ、いとおもしろければ、御衣賜りて、いとめづらしきことに人思へり。上達部みな乱れて舞ひ給へど、夜に入りてはことにけぢめも見えず。文などを講ずるにも、源氏の君の御をば、講師もえ読みやらず。句ごとに誦じののしる。博士どもの心にもいみじう思へり。かうやうのをりに、まづこの君を光にし給へれば、帝もいかでかおろかに思されむ、中宮、御目のとまるにつけて、春宮の女御のあながちに憎み給ふらんもあやしう、わがかう思ふも心憂しとぞ、みづから思し返されける。

〔藤壺〕大方に花の姿を見ましかば露も心の置かれまじやは御心の中なりけむこと、いかで漏りにけむ。

桜の花の宴でも時節にあった舞樂が万端に用意され、楽人たちによる春鶯囀が披露された後、一昨年秋の紅葉の賀で光源氏が舞った青海波の見事さが皆の頭の中に思い起こされたそのタイミンクで、桐壺帝や藤壺中宮と並んで着席して観覧していた春宮が、弟の光源氏に対してここで舞うことを要望した。挿頭の花まで下賜されての切なる要請を断り切れず、光源氏はやむなく春鶯囀を一さし舞い、その見事さに、舅の左大臣も「恨めしき」を忘れて感涙を流した。

それを受けて桐壺帝は左大臣の嫡子で光源氏の義理の兄でもある頭中将を指名して舞うことを命じると、かねてから準備していた頭中将は柳花苑をやや長めに舞い、桐壺帝から褒美として御衣を下賜され、そのことが前例のない異例なことと人々は感じたことが描かれた場面である。ついで上達部たちが興じて舞を舞ったことが記され、さらに源氏の詩作の出来映えには大学の博士たちも感服し、そういった光源氏の見事さに父の桐壺帝も満足し、藤壺中宮も光源氏に惹かれる自分を自覚することが記されていく。

この桜の花の宴において、光源氏と頭中将が対比されて描かれるのは「紅葉賀」の場面と同じ構成となっているが、ここで注目したい点は、左大臣の心内描写「恨めしきも忘れて」の解釈である。

従来この「恨めしき」は、「日ごろの恨めしきも忘れて」と現代語訳されるのだが、さらに頭注などでは何に對する「恨めしき」と解釈されているのか、主立った注釈書を参照してみたい。

〔資料二〕「恨めしき」の解釈

①日頃葵上に冷淡な源氏の君への恨めしきも忘れて

(日本古典全書『源氏物語』一の頭注)⁽³⁾

②左大臣は日ごろ源氏をうらめしく思っていたのであるが、そのうらみも忘れて、源氏の舞のすばらしさに胸打たれ感涙を落とすのである。

(『源氏物語評釈』二の評釈)⁽⁴⁾

③葵の上に冷淡なのを恨む気持ちも忘れて

(新潮日本古典集成『源氏物語』二の頭注)⁽⁵⁾

④左大臣の「恨めしき」は源氏が葵の上に冷淡であることによる

(新編日本古典文学全集『源氏物語』一の頭注)⁽²⁾

と解釈されている。この解釈はその後の語句解釈においても「左大臣は、源氏が葵の上に冷淡なのを恨む気持ちも忘れて」として踏襲されている。⁽⁶⁾

しかしここで語られる左大臣の「恨めしき」とは、果たして愛娘に心を通わせようとしないうらみ源氏に対して向けられたものなのか。そういった私的な「恨めしき」と解釈してよいのであろうか。そのあとに展開されるプロット、すなわち桐壺帝が頭中将に舞を命じ、褒美に御衣を下賜する異例の待遇との対比から読み解くと、「恨めしき」には別の対象を考え合わせることもできるのではないか。

二、「紅葉賀」における左大臣と光源氏

光源氏は巻一「桐壺」で元服した時からすでに左大臣の愛娘である葵の上を妻としている。親同士が相談し、我が子のために良かれとして決めた結婚ではあったのだが、当人同士にとって夫婦仲はしつくりとは行かなかった。光源氏を婿として迎えた左大臣は趣向を

尽くして光源氏を敬待するにも関わず、新婚当初から「絶え絶えにまかで給へ」と左大臣邸への足は遠のいていた。この状態は結婚して七年を経過しても変わることはなく、「紅葉賀」巻の半ばで光源氏が元日に内裏から左大臣邸の葵の上を訪れた場面描写においても「例の、うるはしうよそほしき御さまにて、心うつくしき御気色もなく苦しければ」「御心の隔てどもなるべし」と描写され、葵の上の取り澄まして打ち解けるそぶりのない様子に、両者の心の溝が明らかに示されている。

桐壺帝の同母妹である大宮と左大臣との間に生まれた葵の上は、将来天皇の后となるべく傳かれて養育された姫君であった。それが親土の取り決めによって、十六歳の時に右大臣から打診のあった春宮（右大臣の孫でのちの朱雀帝）との結婚話が断わられて臣籍降下した光源氏と結婚させられることで、天皇の后となることなくなった上、夫となった光源氏よりも四歳年長であったこともあって初めからわだかまりのある仲であった。さらに結婚六年目にあたる巻五「若紫」では、光源氏が北山で出会った藤壺の姪にあたる若紫（のちの紫の上）を二条院の自邸に引き取って養育していることを知ったために、なおさら心を通わすことができないのである。

言葉を交わしても打ち解ける様子のない葵の上を見た光源氏は「うち過ぐし恥づかしげに盛りにととのほりて見給ふ。何事かはこの人の飽かぬところはものし給ふ、我が心のあまりけしからぬすさびにかく恨みられ奉るぞかし、と思し知らるる」と自省している。葵の上の完璧なまでに整った様子を見て、自分の気まぐれさに原因があることを自覚し反省する光源氏の心情が描写されている。

父左大臣も「かく頼もしげなき御心を、つらしと思ひ聞こえ給ひながら、見奉り給ふ時は恨みも忘れてかしづきいとなみ聞こえ給ふ」と描かれている。左大臣は、結婚してから七年も経過しているのに向に打ち解けた様に見えない光源氏の「心」が頼りなくて、恨めしく思いながらも、光源氏と対面している時は「恨みも忘れて」諸事お世話をしているのである。

この「紅葉賀」巻における左大臣の「恨みも忘れて」と「花宴」巻における「恨めしさも忘れて」を統合した解釈が、春鶯囀を「さし舞った姿を見た左大臣の心情描写「日ごろの恨めしさも忘れて」に繋がるのだろう。しかし「紅葉賀」巻の正月から一年二箇月以上経過している「花宴」巻において、この場面の描写を詳細に検討すると、この「恨めしさ」は「日ごろの」ものではなく、別の対象を考え合わせることができないのではないか。

三、「花宴」冒頭部分の場面分析

卷八「花宴」は、冒頭から光源氏と頭中将との対比が描写されている。

〈資料三〉「花宴」冒頭部分

二月の二十日余り、南殿の桜の宴させたまふ。后（藤壺）、春宮の御局、左右にして参上り給ふ。弘徽殿女御、中宮のかくておはするを折節ごとに安からず思せど、物見にはえ過ぐし給はで参り給ふ。日いとよく晴れて、空の気色、鳥の声も心地よげなるに、親王たち、上達部よりはじめて、その道のはみな探韻賜り

て文作り給ふ。宰相中将「春と言ふ文字賜れり」とのたまふ声さへ、例の、人に異なり、次に頭中将、人の目移しもただならず思ゆべかめれど、いと目安くもてしづめて、声づかひなどものものしく優れたり。さての人々は、みな臆しがちに鼻白める多かり。地下の人はまして帝、春宮の御才かしこく優れておはします、かかる方にやむごとなき人多くものし給ふころなるに、恥づかしく、はるばると曇りなき庭に立ち出づるほどはしたなくて、やすき事なれど苦しげなり。年老いたる博士ども、なりあやしくやつれて、例馴れたるもあはれに、さまざま御覧するなむ、をかしかりける。

この部分は前掲の（資料一）の直前にあるもので、紫宸殿（南殿）の桜の花の宴に、中宮となった藤壺宮と弘徽殿女御腹の春宮（光源氏の異母兄）を左右に従えて桐壺帝が着席し、中宮の藤壺宮を妬む弘徽殿女御も春宮の母として参上している。うらかな春の日に、晴れ渡った空のもと、鳥の声も聞こえる中で、桜の花の宴はまず漢詩文を作ることから始まった。宰相中将である光源氏が探韻として「春」字を賜ったことを発声して披露する。光源氏に衆目が集まるのを意識しながらも頭中将もそつなく立派に振る舞ったのに対し、その他の人々はみな気後れして、作詩すること自体は難しいと感じていないものの、桐壺帝や春宮の学才が優れていることもあって、雰囲気につきり飲まれてしまっている様子が描かれている。その一方で、年齢を重ねた大学の博士たちは、身なりは貧しいものの臆せず場馴れしており、そうした光景を感慨深く御覧になる桐壺帝の姿が「をかしかりける」と賞賛されている。ここでは学才

豊かな帝と春宮が君臨し、地下に至るまで漢詩文作者に逸材が多いこと、このような文学の場に場馴れしている大学の博士たちが揃っていることで、桐壺帝の御代を「聖代」と言祝ぐ書き手の意識が垣間見られる。

その状況の中で、（資料一）に示した場面が展開する。鳥の声が聞こえる中で、衆人たちが春鶯囀を舞い、皆が一昨年秋に「紅葉賀」で光源氏が舞った青海波を思い起こしているタイミングで、春宮が異母弟の光源氏に対し、挿頭の花を下賜して春鶯囀を舞うことを切に要請したのである。『源氏物語』において春宮は大らかな性格として描かれ、光源氏と二人だけで対面する時はいつも二心なく会話しており、光源氏もそれは理解していることが繰り返し記される。この場面でも、春宮は政治的意図など思いも寄らず、ただ単にその場に同席していた者たちの共通の思いを代表する形で、光源氏に春鶯囀を舞うようにと何度も要請したのである。

しかし人のふるまいは、その立場によってその言動に想定外の別の意味を付加させてしまう場合がある。帝、春宮、中宮、春宮の母で右大臣の娘である弘徽殿女御をはじめ、左大臣以下の群臣たちや博士たちが集うこの盛儀の場で、まもなく父の桐壺帝から讓位され天皇の位につくであろう春宮が、異母弟の光源氏を指名し、挿頭の花を下賜して無理矢理に春鶯囀を一さし舞わせたとの結果になったこの状況は、左大臣以下の群臣たちにとってどのように感じられたのだろうか。

四、左大臣の心情

春宮は、桐壺帝と右大臣の娘である弘徽殿女御との間に誕生した第一皇子である。大らかな性格であったが、心優しくおとなしい方であったため、天皇に即位した時には母方実家の祖父である右大臣が政治の実権を握り、偏狭な性格のまま横溢に振る舞う事態になることは見えていた。しかも、かつて右大臣側から申し出のあった左大臣娘の葵の上を春宮の妃にする話は、左大臣が桐壺帝と妻大宮と相談のもとに断り、右大臣家が最も警戒する帝鍾愛の第二皇子である光源氏と結婚させて後見役を務めていた。左大臣嫡子の頭中将と右大臣の四の君との結婚は承諾したものの、頭中将は妻方実家の右大臣家とは距離を置いて寄りつこうともしないこと⁽⁷⁾から、執念深い右大臣は左大臣に対して根深い恨みを持ち続け、両大臣の間柄には隔たりがあった。

そういった政治状況のもと、右大臣家の孫にあたる春宮が異母弟で左大臣の婿である光源氏に対し、群臣たちの居並ぶ前で春鶯囀を舞うよう要請し、無理矢理従わせたというこの事態は、政治家として敏腕を振るってきた左大臣の眼にどのように映ったであろうか。

左大臣には、春宮が天皇に即位した後の明確な上下関係を如実に示したものと見えたはずである。自分の婿であり世話をし続けてきた光源氏が、右大臣家側から明らかに下に見られて命じられ、それに従わざるを得なかった。光源氏はあらかじめ用意して舞ったのではなく、春宮から「切に責めのたまはするに逃れ難くて」仕方なく

舞ったのである。この言動は光源氏に対してさえ当人の意向など耳を貸すことなく、ただ思うまま命じて無理矢理従わせ、それをこの場に居並ぶ群臣たちに見せつける示威行為だと解釈して、左大臣は危惧を抱いたのではないか。つまりこの光源氏へのふるまいを、近い将来の右大臣家側から自分たち左大臣家側に対する仕打ちの象徴と見て、それを「恨めしさ」という表現で描き出したものと見るのである。

もともとそういった大人の事情での「恨めしさ」を忘れさせてくれるほど光源氏の舞が見事であったことは、左大臣家の面目を十分に施すことにもなった。そういった左大臣の複雑な心情を読み取った桐壺帝は、間髪を入れず「頭中将、いづら。遅し」と声をかける。この桐壺帝の言動は、左大臣家と右大臣家双方のバランスを長年うまく取り続けて君臨してきた帝の器量を示すものでもある。春宮が光源氏に舞を切に命じて従わせたと見られるままこの場を終わらせることなく、帝自身が頭中将を指名することで、左大臣家への配慮を群臣たちに示していると見られるからである。右大臣家側からは舞人を出してはいない。頭中将は桐壺帝が自分を指名したこと⁽⁸⁾の意を汲み、しかもあらかじめ心づもりをしていたこともあって、柳花苑を「いとおもしろ」く舞い、桐壺帝からは褒美の御衣を賜った。本文に「いとめづらしき事に人思へり」とあることから、群臣たちの前での異例の御衣下賜であったことが語られている。

「紅葉賀」巻で桐壺帝は、試楽で披露した光源氏と頭中将の舞に對して「今日の試楽は、青海波に事みな尽きぬな」と評価し、「片手もけしうはあらずこそ見えつれ、舞のさま手遣ひなむ家の子は異

なる。この世に名を得たる舞の男どもも、げにいとかしこけれど、ここしうなまめいたる筋をえなむ見せぬ」と藤壺宮に語っている。光源氏が舞った青海波を本日の白眉と認めながら、舞の相手役の頭中将に対しても「悪くはないと見えた。舞の専門家たちはまことに見事だが、良家の子は舞う姿も手さばきも、実に大らかで優雅であるところが良い」と高く評価していた。その頭中将が桜の花の宴で舞うことがあるかも知れないと心づもりしていた柳花苑を披露する機会を、桐壺帝自らの言動で作り、やはり見事であったために皆の前で異例の御衣下賜に至る。これは左大臣家の面目を大いに施したはずであり、それは複雑な気持ちを抱いたに違いない左大臣に対する桐壺帝の配慮でもあった。表向きは盛儀を描き出しながら、その場に同席する登場人物たちの心情を描き出す『源氏物語』の手法において、対照的な位置に置かれた人物たちの心の動きとその展開が、この場面でも指摘できる。

五、源氏古注の検証

この「花宴」巻の「左大臣、恨めしきも忘れて、涙落とし給ふ」について、源氏古注を時系列で紐解いてみると、平安後期の世尊寺伊行『源氏釈』の冷泉家時雨亭文庫本および前田家本、また鎌倉初期の藤原定家『奥入』⁽¹⁰⁾一次本の明融本や大島本、二次本の定家自筆本には当該箇所についての注記がなされていない。鎌倉後期に素寂がまとめた『紫明抄』⁽¹¹⁾、南北朝期に河内方がまとめた『原中最秘抄』⁽¹²⁾や、四辻善成が記した『河海抄』⁽¹⁾や、室町中期に一条兼良が集大成

した『花鳥余情』⁽¹³⁾でも確認できない。

しかし、明応四年（一四九五）正月に宗祇の源氏学を藤原正存が「師説」としてまとめて肖柏が奥書を記した『二葉抄』⁽¹⁴⁾には「源氏と葵上と御中の思ふやうならぬ事也」とあるので、十五世紀末の室町中期に宗祇の源氏学から、左大臣の「恨めしさ」についての注釈がなされてきたことになる。

その後、肖柏から『源氏聞書』を借り受けた三条西実隆は『弄花抄』⁽¹⁵⁾をまとめるが、「源氏葵上との思ふやうならぬ事也」とそのまま記している。室町後期に入って三条西公条が父実隆の源氏講釈を筆録してまとめた『細流抄』⁽¹⁶⁾には「葵上にふさはしからぬをうらむる心あれと、さやうの心もうち忘れ給也」とある。里村昌休の『休閒抄』⁽¹⁷⁾には「其比葵上へ源うとく敷也」とあり、また元龜二年（二五七二）成立とみられる連歌師覚勝院の『源氏物語聞書 覚勝院抄』⁽¹⁸⁾では「葵上の父おと、也。源氏の舞をみ給ひて葵上へおろそかなる心の恨も忘たると也」とあるから、「愛娘の葵の上につれない態度を取り続ける婿光源氏に対する舅としての恨み」といった解釈は、宗祇以来連歌師の解釈やそれを取り込んだ三条西家の解釈として室町中期以来変わることなく継承されてきたことになる。

安土桃山時代の里村紹巴『紹巴抄』⁽¹⁹⁾には「左のおと、其比葵上へ御無音故也」とあり、光源氏が葵の上に対して音沙汰がないゆえと注釈しているから、「恨めしさ」はやはり光源氏に向けられている。関白の九条種通が叔父三条西公条から伝授された源氏学をまとめた『孟津抄』⁽²⁰⁾には「葵と中よからぬ事也」とあり、公条息の三条西実枝から源氏講釈を聞いた中院通勝が丹後下野中に細川幽斎の助

力を得て慶長三年（一五九八）にまとめあげた『岷江入楚』⁽²¹⁾においても「左のおと、箋曰こ、にはしめて左府とかけり 秘葵上にあふさはしからぬをうらむる心あれとさやうの事をも打わすれ給ふ也 弄同」と記されている。この解釈は北村季吟が江戸前期に集大成して延宝元年（一六七三）に成立させ同三年に刊行した『源氏物語湖月抄』⁽²²⁾においても「葵上にふさはしからぬをうらむる心あれと、さやうの心をもうちわすれ給ふ也」として継承されている。今日の当該箇所源の源流は、室町時代中期の連歌師宗祇の源氏学から始まり、碩学三条西実隆を経由して北村季吟以後にも継承されてきたものとみてよいだろう。

なお一条兼良は『花鳥余情』で、桐壺帝が頭中将の見事な柳花苑の舞の褒美として御衣を下賜したことを「めづらしき例に人おもへり」とある箇所に「花宴の日殿上の舞又勅禄を給ふ事なとめつらしき例なり」と註釈する。左大臣家の嫡男頭中将は、群臣たちの前で大いに面目を施したことになる。

六、左大臣家の面目

「花宴」巻に、後半で光源氏が左大臣邸を訪れて左大臣と桜の花の宴のことを回想しながら語り合う場面がある。

〔資料四〕「花宴」後半部

（葵の上）

大殿には、例のふとも対面し給はず。つれづれとよろづ思し
巡らされて、箏の御琴まさぐりて「やはらかに寝る夜はなく
て」とうたひ給ふ。大臣渡り給ひて、一日の興ありし事聞こえ

給ふ。「ここの齢にて、明王の御代、四代をなむ見侍りぬれど、この度の様に文ども警策に、舞、楽、物の音ども調ほりて、齡延ぶる事なむ侍らざりつる。道々の物の上手ども多かるころほひ、くはしうしろしめし調へさせ給へるけなり。翁もほとほと舞ひ出でぬべき心地なむし侍りし」と聞こえ給へば、「ことに調へ行ふ事も侍らず。ただ公事にせしうなる物の師どもを、ここかしこに尋ね侍りしなり。よろづの事よりは、柳花苑、まことに後代の例ともなりぬべく見給へしに、ましてさかゆく春に立ち出でさせ給へらましかば、世の面目にや侍らまじ」と聞こえ給ふ。弁、中将など参りあひて、高欄に背中押しつつとりどりに物の音ども調べあはせて遊び給ふ、いとおもしろし。

せっかく訪れても葵の上は相変わらず光源氏に打ち解けてくれないうが、舅の左大臣は過日の桜の花の宴のことを話題にして、四代も帝たちに仕え、今年五十四歳になる自分の経験を振り返ってみても例のないあの日の盛儀の見事さを語り、光源氏の準備を褒め、この翁も舞い出しそうになるほどだった、と感動を伝えている。

これに対して光源氏は「自分の役目として準備を調えたまで」と謙遜の言葉を述べたあと、左大臣家の嫡子頭中将が柳花苑を見事に舞い、帝から褒美の御衣を下賜されたことは後代の例となること必定で、もし左大臣も舞い出でいたら大いに面目となったことでしょうと左大臣家を言祝いでいる。

左大臣がこれほど印象深く感動しているのは、右大臣家に押され気味の政治状況において、「左大臣家の面目」が大いに施されたこ

とも大きく起因しているのを見てよいだろう。しかもこの場面では、光源氏と葵の上との相変わらず心が通わない夫婦の有り様に対し、左大臣は何も言及していない。そして物語は展開する。卷二〇「賢木」で桐壺院が崩御し、翌年冬に諒闇が明けたところで藤壺中宮が出家入道すると、右大臣家の横溢に堪えかねた左大臣は、年明けについて致仕してしまうのである。

ま と め

以上、物語の構成とプロットの展開を視点として分析してきた。「花宴」巻冒頭部の桜の花の宴の場面では、春宮の切なる要請を拒みきれなくなった光源氏が春鶯囀を一さし舞う姿を見て、左大臣は「恨めしさ」を忘れて落涙するプロットと、直後に展開する桐壺帝が左大臣の嫡子頭中将を指名して柳花苑を舞わせ、褒美に御衣を下賜するプロットが、「左大臣家の面目」を軸にして対照的な構成となつていることを検証した。

さらに「花宴」巻後半で左大臣邸を訪れた時の場面と関連させて考察すると、ここでも「左大臣家の面目」が鍵となつて展開していることが明らかになった。(資料一)で描かれた「左大臣、恨めしさも忘れて、涙落とし給ふ」における左大臣の「恨めしさ」の対象とは、室町時代中期に宗祇の源氏学が指摘して以来、この源氏古注が現在まで継承されてきたような愛娘の葵の上につれない光源氏に対するものではなく、居並ぶ群臣たちの面前で光源氏に春鶯囀を舞うことを執拗に命じ、拒むことができずに一さし舞わせた右大臣家

側の春宮の言動と、近い将来には威圧的に命じてくるであろう右大臣家に対する「恨めしさ」であるとみることができるとはあるまいか。

【注】

- (1) 『源氏物語』本文は、新編日本古典文学全集『源氏物語』一(小学館平成六年刊)による。
- (2) 阿部秋生氏・秋山慶氏・今井源衛氏・鈴木日出男氏校注・訳の新編日本古典文学全集『源氏物語』一(小学館平成六年刊)による。日本古典文学全集(旧全集)から訂正されていない。
- (3) 池田亀鑑氏校注の日本古典全書『源氏物語』一(朝日新聞社昭和二一年刊)による。
- (4) 玉上琢彌氏著『源氏物語評釈』二(角川書店昭和四〇年)による。
- (5) 石田穰二氏・清水好子氏校注の新潮日本古典集成『源氏物語』二(新潮社昭和五二年刊)による。
- (6) 鈴木一雄氏監修・伊藤博氏編集『源氏物語の鑑賞と基礎知識』二二二「紅葉賀・花宴」(至文堂平成十四年刊)による。
- (7) 頭中将が右大臣の四の君のもとに寄りつこうとしないことは、早く「筈木」巻で「右大臣のいたはりかしづき給ふ住みかは、この君(頭中将)もいと物憂くして、好きがましきあだ人なり」とあり、また「花宴」巻においても「頭中将のすさめぬ四の君などこそよしと聞きしか」とあり、器量よしではあったらしいが、夫婦仲は疎遠であつたらしいことが記されている。
- (8) 『源氏釈』冷泉家時雨亭文庫本は、冷泉家時雨亭叢書第四二『源氏釈・源氏狭衣百番歌合』(朝日新聞社平成十一年)、及び中野幸一氏・栗山元子氏編『源氏物語古注釈叢刊』第一卷(武蔵野書院平成二二年刊)による。
- (9) 『源氏釈』前田家本は、池田亀鑑氏著『源氏物語大成』第十三冊資料編(中央公論社平成元年刊)による。
- (10) 『奥入』諸本は、池田亀鑑氏著『源氏物語大成』第十三冊資料編(中央

- 公論社 平成元年刊)による。
- (11) 素寂の『紫明抄』と四辻善成の『河海抄』は、玉上琢彌氏編『紫明抄河海抄』(角川書店 昭和四三年刊)による。
- (12) 『原中最秘抄』は、池田亀鑑氏著『源氏物語大成』第十三冊資料編(中央公論社 平成元年刊)による。
- (13) 一条兼良の『花鳥余情』は、中野幸一氏編『源氏物語古注釈叢刊』第二卷(武蔵野書院 昭和五三年刊)による。
- (14) 藤原正存の『一葉抄』は、井爪康之氏編『源氏物語古注集成』第九卷(桜楓社 昭和五九年刊)による。
- (15) 三条西実隆の『弄花抄』は、伊井春樹氏編『源氏物語古注集成』第八卷(桜楓社 昭和五八年刊)による。
- (16) 三条西公条の『細流抄』は、伊井春樹氏編『源氏物語古注集成』第七卷(桜楓社 昭和五五年刊)による。
- (17) 里村昌休の『休閒抄』は、井爪康之氏編『源氏物語古注集成』第二二卷(桜楓社 平成七年刊)による。
- (18) 野村精一氏・上野英子氏編『源氏物語聞書 覚勝院抄』(穂久邇文庫蔵本)は、影印本三(汲古書院 平成二年刊)による。
- (19) 里村紹巴の『紹巴抄』は、稲賀敬二先生旧蔵・安田女子大学安田女子短期大学図書館蔵稲賀文庫本(『源氏物語抄』三と題する江戸初期の横本二〇冊の書写本で巻末に「永祿七年五廿五朝天終功了」の紹巴の奥書を有し、猪苗代兼如所持本の形態を伝える)、及び中野幸一氏編『源氏物語古注釈叢刊』第三卷(武蔵野書院 平成十七年刊)による。
- (20) 九条植通の『孟津抄』は、野村精一氏編『源氏物語古注集成』第四卷(桜楓社 昭和五六年刊)による。
- (21) 中院通勝の『岷江入楚』は、中野幸一氏編『源氏物語古注釈叢刊』第六卷(武蔵野書院 昭和五九年刊)による。
- (22) 北村季吟の『源氏物語湖月抄』は、三谷栄一氏増補の『増注源氏物語湖月抄』(名著普及会 昭和五七年増補版第二刷)による。